



HACK

4

キス

KAI SHIGIHARA



4 キス

二日後。

朝九時。きちんと身支度をしたレスリーは、ジュリアスの使っているベッドルームのドアの前に立った。

「ジュリアス！ 朝よ、朝！ 起きて！」

最初からノックは強力。

なにしろ、昨日の朝でもう懲りている。ジュリアスは朝に弱い。それはもう、悲しいぐらいに

。

「ジュリアス！ ジュリアス！！」

がんだドアを叩くと、ようやく部屋の中からうめき声のようなものが聞こえてきた。

「起きた？ もう九時よ！」

「……」

「ちょっと！ 寝ないで起きて！」

何が悲しくて仕事でいい年した男を起こさなければならないのか。レスリーは、がっくりとドアにもたれかかった。

だがこれも、ドミニクから命じられている仕事の一つだ。工作中的ジュリアスは、どこまでも生活リズムが崩壊するので、人間らしい生活をさせること。命じられたときはよく意味がわからなかったが、昨日、目のあたりにすることになった。

手始めにと、昨日、ジュリアスはターゲットの会社のシステムに接触を試みた。持ち込んだコンピューターをホテルのwifiにつなげただけで、ジュリアスの意識は世界中を駆け回るらしい。詳細など、わからないけれど。

わかったのは、それをしている間、ジュリアスは生きる機械と化すこと。目を閉ざしたまま、ぴくりとも動かない。眠っているより、死んでしまったように見えた。

あらかじめ予定していた時間になって、レスリーはジュリアスに声をかけて彼を現実世界へと引き戻したわけなのだが、その後、ジュリアスは死んだように眠ってしまった。目が覚めた後、ようやく人間に戻った。

機械と化すジュリアスを人間にしておくのが自分の任務なのだと、レスリーは悟ったのだ。

「入りますから！」

レスリーはそう宣言してから、ドアを開ける。

昨日の朝と同様、ジュリアスはベッドで行儀よく眠っていた。寝返りなど一度もしなかったよ

うに、まっすぐに姿勢よく横たわっている。

「ジュリアス！ ジュリアス、起きて！」

それがまるで死人のように見えて、レスリーはあえて彼の肩を掴んで、ぐらぐらと体をゆさぶる。何度か揺さぶって、ようやくジュリアスの眉がびくりと動いた。

「朝ですよー！ 起きる時間ですよー！」

「……聞こえた」

「じゃ、起きて。九時よ」

「……もうちょっと」

「駄目」

ジュリアスが掛け布団を抱え込み、ぐるりと丸くなる。

(人間に戻った)

レスリーはほっとしてしまった。仕事を始めてからというもの、ジュリアスは人間ではない時間が長すぎる。眠っている姿だって、魂が抜けてしまっているように見えるから。

すると、ぷっと、ジュリアスが小さく噴出した。隠そうとしているが、ばればれだ。キュートすぎる。どうやら、レスリーの思考が聞こえたらしいが、それにももう、慣れてしまった。

レスリーは広いベッドルームのカーテンを開けに、窓へと向かう。

「弟がいたら、こんな感じかしら」

レスリーもジュリアスも、同い年の二十五歳。男性は精神的に幼いとはよく聞くけれど、この年齢になってもそうなのだろうか。

「兄弟いないの？」

「私は一人っ子なの」

「……父上は伯爵だったよね」

「跡取り娘よ、一応」

「それは大変だ」

部屋中のカーテンを開けて、朝の光を部屋の中に入れる。振り返ると、ベッドでシーツにくるまったまま、ジュリアスがレスリーを見つめていた。

くしゃくしゃになった淡いブロンドが顔にかかり、濃いグリーンの瞳がレスリーを見つめる。男性に対して色っぽいという言葉を使うのはそうそうないと思っていたが、ジュリアスと一緒にいるとそうでなくなる。一瞬だが、見とれてしまった。この思考は聞こえてしまっただろう。

「今朝も綺麗だね、レスリー。そのブルーのドレスは君にとっても似合っている。そうやって光の中に立っていると、ドレスが光に透けて、体のラインが」

手じかにあったクッションを顔めがけて投げつけると、ジュリアスは寝返りを打ってクッションの直撃を避けた。そしてそのまま、声を殺して笑っている。

レスリーがジュリアスに見とれてしまったとき、彼に賞賛の言葉を頭の中で呟いてしまったとき、ジュリアスも自分の頭の中をレスリーに聞かせる。それが彼なりのフェアだからそうするとわかっているが、お互いに褒め合うようになるのはひどく恥ずかしい。

ジュリアスほどの男性に、まっすぐに褒められるのは嬉しい。美しい可愛らしいとストレート

に褒められるのは、女としての自信も持たせてくれる。

「……寝起きにはパンチ力ありすぎだな」

と、つぶやき、ちょっぴりわざとらしく、シーツの中でごそごそ体を動かしている。

「目が覚めてよかったじゃない」

「覚めすぎだよ、レスリー」

レスリーが枕元に近寄ると、ジュリアスはまた寝がえりをうってレスリーの方に顔を向け、賞賛の目でレスリーの頭の上から足先まで、じっくりと見つめた。

こんな風に男性から見つめられるのは苦手だった。特にここ二年ほどは、そんな風に見られようものなら、体中の毛を逆立てて逃げ出していた。

今、逃げ出すどころか、ジュリアスの視線を好ましく感じているのは、彼が見るだけで決して手を出してこないとわかっているから？ もし出してきたとしても、腕力ではなく精神力で彼を撃退できるとわかっているからだろうか。

「女伯爵になるの？ それとも、結婚相手になってもらう予定？」

「まだ決めてないの。結婚相手にもよるでしょ」

「親の決めた婚約者は？」

「父は婚約させようとしたんだけど、私が抵抗したの。今はもう諦めているわ」

「それはよかった。俺の母は、やっぱり伯爵家の一人娘で、父と結婚するまでにはそれはもう大変だったらしい」

ジュリアスの父、軍司令官は、伯爵だったはずだ。

「それじゃ、お父様が爵位を継いだの？」

「父は父で、伯爵だったから、継がなかった。両方つぐという話もあったらしいけど、結局、兄の一人が母の爵位を継いでる」

「ドミニクが？」

「長男のドニは、父の爵位を継ぐ。二人目の兄が、母の爵位を。俺は運がいいことに、三男なんだ」

「兄弟多いのね！」

「母が一人娘で色々あって、子供は一人でも多い方がいいと父は思っただけで、結婚したら、出来るだけ子供はたくさんつくることってというのが、我が家の家訓だったりする。ちなみに、俺は五人兄弟だ。下に、弟と妹がいる」

「五人！」

一人っ子のレスリーには想像も出来ない世界だ。

そして、ジュリアスに兄が二人もいることが、納得出来た。やはり、この男は弟気質がある。頼りないということではなく、世話をやかれなれているというか。

「君は俺の母と気が合うかも。帰ったら紹介するよ」

「ありがとう。ぜひ」

「俺達兄弟は問題児揃いで。ひねくれずに育ったのは、兄弟同士で理解し合えたことと、愛情深い母のおかげなんだ」

なんのてらいもなく、自分の母を褒めることのできる男性は少ない。絆の強い家族の中で、愛情深く育てられたんだらうなと思える。

ジュリアスに脅威を感じないのは、精神力で彼に勝てると確信しているだけじゃない。彼がひどいことをしないと、この短期間で信頼できるようになったから。誠実で、自分と同じ常識を持ち合わせていると、思えたから。

「レスリー」

「？」

シーツにくるまっていたジュリアスは、ベッドの上に起き上がり、レスリーを見上げていた。「バスルームに行きたいんだが。そこで見ててくれても構わないけど、お互いちょっと不適切な空気になりそうだし」

「……失礼しました！」

裸ではないが、下着に近い格好で寝ているわけで。

思わず、セクシーなジュリアスの姿を想像してしまいそうになって、レスリーは脱兎のごとくジュリアスの寝室から駆け出した。

レスリーが用意した朝食を食べて、二人は車に乗って、とあるビルへと出かけた。そこには、軍と協力関係にある企業が入っている。勿論、対外的には無関係となっているが、軍の出先機関の一つだ。そこには、スーパーコンピューターがあり、ジュリアスはそれを使って、昨日よりもターゲットに近づこうとしていた。

受付で名乗ると、来客用の名札を渡され、まるで商談にでも来たような客のように、奥へと案内される。だが、エレベーターに乗り、廊下を奥へと進むうち、どんどんと人けがなくなっていく。そして、地下だろうか、巨大なコンピューター室に案内された。

「今、社内のシステムを一時的にサブコンピューターに移す作業をしています。あともう少し、時間をください」

案内してくれた技師らしき男は、そう短く言うと、足早に端末の方へと歩き去る。同じ様に端末にかじりついて作業をしている技師数名に、急ぐようにと指示を出しながら、彼自身も端末にはりついた。

レスリーは緊張しているのを自覚しながら、すすめられた椅子に腰を下ろす。

この仕事が諜報活動であることは承知していたが、今まではそれらしい仕事なかった。それが、政府の秘密の出先機関に入り、巨大なスーパーコンピューターを前にすると、リゾートでジュリアスのお世話をするだけが仕事ではないのだと、思い出させてくれる。

ジュリアスはというと、監視カメラや盗聴器の類を探っているのか、無言で室内をゆっくりと歩きまわっていたが、準備が出来たと声をかけられて、レスリーの隣に戻ってきた。

「ここは味方の内部だから、緊張することはない」

技師たちが部屋を出て行って、レスリーとジュリアスの二人きりになると、そう言って微笑んでくれる。

「これからやることも、昨日とほぼ同じだしね」

「また、あなたは生きてるコンピューターみたいになって、それが終わるとダウンするってこと？」

「まあ、そういうこと」

と、ジュリアスは苦笑する。

「それなら、その椅子ではなくて、あの長椅子に座って始めてくれる？」

「いい考えだ」

部屋の隅にある長椅子を、二人で端末の前に移動させる。三人掛けの真ん中にジュリアスが座れば、準備OKだ。

「今日は一時間ぐらいで終わると思う。これだけ容量が大きくて、近いから、昨日ほど苦戦しない」

「一時間なら、ダウンはどれぐらい？」

「十五分で起こしてくれ。ここをあまり長く占拠するのも申し訳ないしね」

「わかったわ。無茶しないでね」

「わかっている。後をよろしく」

レスリーはジュリアスの邪魔にならないように、パーティションで仕切られた隣のスペースに移動する。昨日言われたとおり、ジュリアスがトランス状態になるまでは、彼に視線を向けることもしないように気をつける。ジュリアスにとって、レスリーの意識はとても鮮明に聞こえてくるので、集中の妨げになるのだそうだ。

端末の並ぶコンソールパネルには、コンピューターの稼働をモニターするためだろうか、いくつかのライトがイルミネーションのように光っていたが、しばらくするとそれが一定のリズムを刻むように瞬きだすことに気がついた。そして、そのリズムはどんどん速くなっていく。どうやら、このコンピューターは、ジュリアスの支配下におかれたようだった。

(凄い力よね)

手も触れず、コンピューターを操るだけでも驚きなのに、ジュリアスは操るというより、コンピューターと同化しているように見える。コンピューターの情報処理能力を、自分の脳の一部として使ってしまうかのような。だから、力を使っているとき、ジュリアスは人間っぽくなくなってしまわないだろうか。

長椅子に腰かけ、目を閉ざしているジュリアスを見る。トランス状態に入っている彼は、もうぴくりとも動かない。ちょっとやそっとの音や衝撃では、目が覚めないとも言っていた。これが、彼の弱点。今、ここに敵が侵入してきても、ジュリアスは抵抗出来ない。銃を向けられたって、気がつかない。撃たれて、殺されてしまうだろう。

そして、もう一つ、致命的ともいえる弱点がある。

一時間が経過し、チカチカ瞬いていたモニターの光が消えていく。室内に充満していた、説明するのは難しい、ピリピリとした空気が帯電しているような、そんな感覚が遠くなっていく。理屈ではなく、レスリーには、ジュリアスがトランス状態から抜けたことを感じる。そして、トランスから抜けたジュリアスは、深い眠りに落ちてしまうのだ。

異能力を使うからか、極度に集中するからか、ジュリアスは気絶するように眠りに落ちる。それ

はもう、自分ではコントロール不可能なのだそうだ。今日はそれでも十五分だが、昨日は一時間近く眠っていた。今ここに敵が侵入してきても、やはりジュリアスは無抵抗だ。

一人では働けない、半端者の異能力者だと、ジュリアスは言っていた。諜報活動には向いていないとも。その時はわからなかったが、今はわかる。確かに、ジュリアスは一人では働けない。仕事が終わった後に意識不明になってしまうのだから、彼をかついで逃げてくれる相棒がどうしても必要だ。

それなら、意識不明になっても大丈夫なところから仕事をすればいいとも思うが、彼の力は対象に近ければ近いほど有効なのだそうだ。攻略対象がある場所が安全なケースでしか、彼は働けない。それは、かなりレアケースなのではないだろうか。

「ジュリアス、ジュリアス、起きて。時間よ」

最初はそっと囁き、恐る恐る彼の肩に触れる。指先が触れただけなのに、電気が流れたかのように、ジュリアスの体はびくりと反応した。

（ジュリアス、大丈夫？）

あえて思考で語りかける。声という物理的な刺激よりも、今の彼にはこの方が受け入れやすいようだった。

（私よ、レスリー。十五分たったの。大丈夫？）

（……大丈夫だ）

そう思考が帰ってきた。ジュリアスの目がゆっくりと震えながら開き、レスリーを認識する。ぱちりと瞬きすると、表情のなかったグリーンの瞳に、けだるげな疲労が浮かぶ。

ジュリアスが人間に戻ってきた。

「動けそう？」

「多分……一分待ってくれ」

背もたれに寄りかかり、ジュリアスは深くゆっくりと呼吸する。まだ動きがぎこちない手が伸びて、レスリーの手を握った。

多分、ジュリアスは無意識でやっている。セクシャルな意味合いはまったくない。だから、レスリーは優しく、冷たい手を握り返した。

すると、彼と接触することで何度か体験した、あのぴりっとした電気のようなものが流れたのを感じた。そして何か、深い闇のようなもの、その中にまたたく光のようなものを見たような気がした。ただ、それは一瞬で、闇は追いやられ、夜が明けていくように光が充ち溢れてきた。同時に、冷たいばかりだった手にも、体温が戻ってくる。

ジュリアスの使っているコロンの香り、深い息遣い、とくとくと動く心臓の音、彼を取巻いている色々なもの。ジュリアスという存在を感じた。

「レスリー」

ひどく優しく名前を呼ばれ、レスリーは顔を上げる。すると目の前に、ジュリアスの顔が迫っていた。

触れるだけの、優しいキス。唇に一度触れ、もう一度、今度はぎゅっと少しだけ押しつけられ、唇は離れていった。

「ごめん」

ちっとも悪いと思っていない口調で、ジュリアスがそうつぶやく。

でも、不思議なことに、レスリーも悪いことをしたとは思えなかった。工作中だし、仕事のパートナーとこういう個人的なことはしたくないと思っている。公私混同は最低だけど。それでも、今、ジュリアスとキスをしたのは、悪いことではない。むしろ、キスしなければ、後悔していた。

ジュリアスの存在を強く感じ、そして彼を確かめたかった。それには、キスをして唇の柔らかさと、息遣いと、体温を感じるのが、一番の早道だったから。

「私も、ごめん」

「どうして？」

「衝動にかられたら、お互いにとめあう約束でしょ」

「……今のは衝動じゃないけどね」

するりと、ジュリアスの大きな手が、レスリーの頬を包み込み、離れて行く。

長椅子から立ち上がるジュリアスの口元には、笑みが浮かんでいるように見えた。